ギュンター・シューベルトについて

Günther Schubert

CONTENTS



□ルドルフ・シュタイナー遺稿管理財団報
(Nachrichten der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung)
「カテゴリー論―世界文字のアルファベット。
ギュンター・シューベルトを偲んで」
「Die Kategorienlehre – das Alphabet der Weltenschrift.
Günther Schubert zum Gedächtnis」〜
「ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿」第29号(D29)
(Beiträge zur Rudolf-Steiner-Gesamtausgabe)

■ギュンター・シューベルトについて①
(Günther Schubert)

・編集部による前書き （編集：W・グロデック）
・ロベルト・フリーデンタール：
ギュンター・シューベルトの逝去にあたって
・ギュンター・シューベルトの論文・著作の参考文献一覧
・ギュンター・シューベルトの生涯からの一つのエピソード
（※オッセンドフスキ事件）

■ギュンター・シューベルトについて②

・ヘラ・ヴィースベルガー
「ギュンター・シューベルトの論文に寄せて」
・ギュンター・シューベルト
「アリストテレスのカテゴリー論」
（ヘラ・ヴィースベルガーによる補足説明付き）

■ギュンター・シューベルトについて③

・ルドルフ・シュタイナー：
カバラに関する講義
（1904年3月18日、ベルリンにて。断片的な記録ノートに基づく）
・ヘラ・ヴィースベルガー：
『19世紀のオカルト運動とその世界文化への関係』の出版にあたって
―― 共同編集者ギュンター・シューベルトを追悼して

神秘学遊戯団

■ギュンター・シューベルトについて①
（Günther Schubert）

□ルドルフ・シュタイナー遺稿管理財団報
（Nachrichten der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung）
「カテゴリー論―世界文字のアルファベット。
ギュンター・シューベルトを偲んで」
「Die Kategorienlehre – das Alphabet der Weltenschrift.
Günther Schubert zum Gedächtnis」～
「ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿」第29号(D29)
（Beiträge zur Rudolf-Steiner-Gesamtausgabe）

・編集部による前書き （編集：W・グロデック）
・ロベルト・フリーデンタール：
ギュンター・シューベルトの逝去にあたって
・ギュンター・シューベルトの論文・著作の参考文献一覧
・ギュンター・シューベルトの生涯からの一つのエピソード
（※オッセンドフスキ事件）

※D29に収められている論文の続きは、②及び③でとりあげる

○ギュンター・シューベルトについて

ギュンター・シューベルト（Günther Schubert, 1899–1969）は、
ルドルフ・シュタイナーの同時代人で、
深く人智学に関わった人物として知られている。

ドルナハのゲーテアヌムで長年講師を務め、
特にオリエント学の知識とシュタイナーの膨大な著作に対する
深い理解を活かした活動による貢献たが、
出版物は少なく、主に講演と内部的な研究で知られている。

・生い立ちと家族

1899年9月12日、当時ペルシャ（現イラン）のテヘランで
ドイツ人の両親のもとに生まれる。
父が早く亡くなったため、2人の弟妹とともに、
オランダ人外交官だった継父クノーベル（Knobel）の家族のもとで育つ。
学校はオランダ（ハーグ）で通い、
のちにライデン大学とバーゼル大学でオリエント学（Orientalistik）を学ぶ。

12歳の時、「オリエントの言語を学ぶ」と宣言し、
すでにクラスの歴史年表を書いていたという逸話が残っている。
母が人智学協会の会員だったため、
ギムナジウム時代にシュタイナーの著作に触れ、
弟のリヒャルト（Richard）とともに、その思想の重要性を認識する。

・人智学との関わりの始まり

ライデン大学の学生時代に人智学の学生グループを設立。
1922年4月、ハーグで行われたルドルフ・シュタイナーの
「人智学科学コース」の組織者の一人でもあった。
同年、ウィーンの東西会議（West-Ost-Kongreß）に参加した後、
ドルナッハに移住し、わずかな中断を除きその後47年間をそこで過ごす。

ゲーテアヌム図書館の構築に関わり、
1923年のクリスマス会議（Weihnachtstagung）にも参加。
シュタイナー没後（1925年）、ゲーテアヌムの数少ない常任講師の一人となり、
1948年までほぼすべての大会で講演を行い、講義やセミナーも担当する。

・活動の特徴と専門性

後半生では重い病気で活動が中断されることがあり、
最後の苦しい病床でも妻が献身的に介護したと記されている。
晩年の約20年間は、主にドルナッハの
「ルドルフ・シュタイナー支部」の活動参加者や、
チューリッヒの「アントロポゾフィー協会」の大会向けに講演を行っている。

専門はオリエント学で、
アラビア語、中世ペルシャ語、サンスクリット語を読み書きし、
ラテン語とギリシャ語は当然のように使いこなし、
中国語も独学で幅広い知識を身につけていた。
講演はドイツ語、英語、フランス語、オランダ語で行い、
スペイン語とイタリア語も副次的に学んだ。

シュタイナーの著作に対する知識は極めて深く、
全集（Gesamtausgabe）が構想される以前から、
ほとんどすべてのノートや講演断片を読み、
それらを有機的に結びつける記憶力を持っていた。

講演では大きな視点からテーマを取り上げ、
多視点的に現代の出来事を交え意識の地平を広げるスタイルで、
シュタイナーに似た方法を取っていたと評されている。

歴史、政治、社会学、国民経済学、オリエント関連の最新文献を常に読み、
人智学を閉鎖的な世界観としてではなく、現代との生きた対決として伝えるよう努めていた。

・著作と死後の評価

印刷物として残したものはごく少なく、初期にいくつかの論文がある程度。
しかし、遺稿には膨大な研究ノートが整理された形で残されている。

死後、1970年発行の
『Beiträge zur Rudolf-Steiner-Gesamtausgabe』第29号が
「Die Kategorienlehre – das Alphabet der Weltenschrift.
Günther Schubert zum Gedächtnis」

（カテゴリー論―世界文字のアルファベット。
ギュンター・シューベルトを偲んで）として彼に捧げられている。

この号にはR. フリーデンタールによる追悼文と著作目録、
シューベルト自身の「アリストテレスのカテゴリー論」、
シュタイナーの関連資料などが収録されている。

また、ルドルフ・シュタイナー遺稿管理委員会（Nachlassverwaltung）の協力者としても、
全体版の構築に関わっていた。

■ルドルフ・シュタイナー遺稿管理委員会報
（Nachrichten der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung）
「カテゴリー論―世界文字のアルファベット。
ギュンター・シューベルトを偲んで」（D29）
「Die Kategorienlehre – das Alphabet der Weltenschrift.
Günther Schubert zum Gedächtnis」

〔目次〕

・編集部による前書き （編集：W・グロデック）

・ロベルト・フリーデンタール：
ギュンター・シューベルトの逝去にあたって

・ギュンター・シューベルトの論文・著作の参考文献一覧

・ギュンター・シューベルトの生涯からの一つのエピソード
（※オッセンドフスキ事件）

・ギュンター・シューベルト：
アリストテレスのカテゴリー論
（ヘラ・ヴィースベルガーによる補足説明付き）

・ルドルフ・シュタイナー：
セフィロトとカテゴリーの問題に関する手記草稿
（おそらく1904年作。縮小ファクシミリ版を収録）

・ルドルフ・シュタイナー：
カバラに関する講義
（1904年3月18日、ベルリンにて。断片的な記録ノートに基づく）

・ヘラ・ヴィースベルガー：
『19世紀のオカルト運動とその世界文化への関係』の出版にあたって
―― 共同編集者ギュンター・シューベルトを追悼して

○編集部による前書き （編集：W・グロデック）

これらの冊子は、現在の形態となってから創刊10年目を迎えます。「ルドルフ・シュタイナー遺稿管理財団報（Nachrichten der Rudolf Steiner-Nachlaßverwaltung）」というタイトルは、今から21年前に誕生した機関誌に由来するものです。その機関誌は、ルドルフ・シュタイナーの著作物の出版に関する実務的・法的な背景や状況を説明・案内することを目的に創刊されました。

その旧シリーズ（現在はすべて絶版）の第5冊目にあたる最終号は、1953年3月に発行されています。すでにその創刊号において、「通常の出版活動に並行して……単独の書籍化には適さない、ルドルフ・シュタイナーの遺稿に遺された未公開資料を掲載するための特別な誌面を発行する予定である」と予告されていました。しかし当時は、全集（Gesamtausgabe）の準備と着手にすぐさま全力を注ぐ必要が生じたため、その計画が実現することはありませんでした。

その後、ルドルフ・シュタイナー生誕100周年にあたる1961年の「ルドルフ・シュタイナー年」を迎え、全集の出版事業が一定の段階に達したことで、当初から意図されていたこの計画をいよいよ実行に移すことが望まれるようになったのです。

それ以来、これらの冊子に掲載されてきた草稿、メモ、断片、書簡などの初公開資料は、基本的には全集（Gesamtausgabe）におけるそれぞれの新刊や改訂版の出版に合わせて選定されています。一般的な精神科学（人智学）的内容の、内部向けおよび一般向けの講義に関するノートの記述やメモ用紙だけでなく、特定の専門分野に関するものも含まれています。例えば、芸術、医学的問い、教育学、そして特輯号として組まれた1924年の「農業講座」に関するメモなどです。さらに、書籍『人間の謎（Vom Menschenrätsel）』の草稿、1921年8月の「サマー・アート・コース」のためにシュタイナー自身が執筆した要約（オートレフェラート）、そして社会三層化や時事問題に関する一連の記録なども特筆すべきものです。

その他の掲載内容としては、1907年にバールにおいてエドゥアール・シュレーのために書き残された「自伝的スケッチ」、同じくシュレに与えられた「人類における三つのロゴスの兆候と発展」に関する記録、マリー・フォン・ジーフェルスとシュレーの間の往復書簡、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスの論文・記録・書簡などが挙げられます。また、第1および第2ゲーテアヌムの中心的協力者であった芸術家アシヤ・トゥルゲーニエフによる初期ドルナッハでの『ファウスト』初演の回想や、豊富な資料によって裏付けられた1917〜19年の年代記（クロニクル）などは、ルドルフ・シュタイナーの活動における重要な出来事を記念するためのものです。これら以外の出版物の中では、ルドルフ・シュタイナーが『自由の哲学』第4章で言及している、生まれつき目の見えない人が手術の前後にどのように知覚世界を捉えたかに関するアウグスト・フランツ博士の臨床報告が挙げられ、その全文が第19号に掲載されています。

今後は、これらの出版物に未印刷の講義録（速記録）や受講者のメモも含まれる予定です。これらは、並行講義（※同内容の別の講義）であるために全集に組み込めなかったものや、メモとしての断片性が高すぎて全集に組み込めなかったものです。本冊子の第26号「ルドルフ・シュタイナーの音楽に関する発言集」では、すでにこうした受講者メモがいくつか活用されており、ギュンター・シューベルトの追悼に捧げられた本号でも同様に活用されています。さらに、将来的に全集の一部として出版が予定されているものの、刊行時期がまだ見通せない多数のテキストや研究資料も存在します。特に、文献目録の「遺稿からの出版物」の部門に挙げられているドキュメントや記録の精査と整理には骨の折れる作業が必要であり、少なくとも部分的にはさらに数年を要する見込みです。これまでに刊行された冊子に含まれる多くの草稿やメモなどもこの中に含まれており、今後も継続して掲載されていきます。近々、最初の数ページしか現存していないものの、フィヒテの『知識論』に関する手稿が公開される予定です。この手稿は断片的な性質のものではありますが、シュタイナーが自伝『我が生涯の歩み』第3章（全集版 51〜52頁）で述べている内容を考慮すると、きわめて高い関心を集めるものです。

今回、これらの冊子に新しいタイトルが与えられたのは、これらが何を目指しているのか、すなわち「ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿（Beiträge zur Rudolf Steiner Gesamtausgabe）」であることを、外見的にも明確に表現するためです。

○ロベルト・フリーデンタール：
ギュンター・シューベルトの逝去にあたって

1969年9月9日、私たちはギュンター・シューベルトという大切な存在を死によって突然奪われてしまいました。彼は、その優れた才能を何ら留めることなく人智学の発展に捧げた、ルドルフ・シュタイナーと同時代に生きた人物のひとりです。

並外れた精神的・知的才能に恵まれた彼は、精神的な事柄を非常に集中して受け入れ、咀嚼することができました。研究することこそが彼の本当の人生であり、同時にそれが彼にとって最大の息抜きでもあるように見えました。彼は研究に没頭するために、人々の前から退き、質素な生活を送ることを受け入れましたが、それを決して窮屈に感じることはありませんでした。

彼は人間の精神世界に対して、例外的なほど広く見渡せる視野を持っていました。その健全で客観的、かつ自律した思考は、常に物事の本質へと彼を導いていたのです。

1899年9月12日、ドイツ人の両親のもとテヘランに生まれ、早くに父親を亡くした後は、オランダの外交官であった継父クノーベルの家庭で、2人の年下のきょうだいと共に育ちました。オランダの学校に通い、のちにライデン大学とバーゼル大学で東洋学を修めました。12歳の時にはすでに、将来東洋の言語を研究すると宣言し、早くも歴史の年代記（なんと自分のクラスの歴史！）を書いていました。

ルドルフ・シュタイナーの著作とは、人智学協会の会員であった母親を通じて、ギムナジウムの生徒だった頃に出会いました。彼は弟のリヒャルトと共に、この精神運動の持つ重大な意義を非常に早くから見抜き、自らに適したものとして実感していました。ライデンでの学生時代には人智学の学生グループを立ち上げ、1922年4月にデン・ハーグで開催されたルドルフ・シュタイナーによる「人智学・科学講座」の主催者の一人としても名を連ねました。同年、ウィーンで開催された東西会議に参加した後、彼はドルナハへと移住しました。それから、わずかな中断期間を除いて、その後の人生の47年間をこの地で過ごすことになります。

彼はゲーテアヌム図書館の設立に尽力し、1923年の「クリスマス財団総会」にも参加しました。そしてルドルフ・シュタイナーの没後は、数少ないゲーテアヌムの常任講師の一人となり、1948年までほぼすべての大会での講演や、講義、ゼミナールなどを通じて精力的に活動しました。

シューベルトの生涯は、世俗から退いた、勤勉な学者のそれでした。人生の後半には、いくつかの重い病気によって活動の長期中断を余儀なくされました。こうした時期、そして最後の数ヶ月に及ぶ苦しい闘病生活の間も、彼は妻からこの上なく献身的な看護を受けました。

晩年の20年間、シューベルトは主に、ドルナハの「ルドルフ・シュタイナー支部」の活動参加者や、チューリヒの「人智学会」の大会に向けてのみ教鞭を執っていました。

彼は極めて優秀な講師でした。生涯を通じて自らの研究成果を講義し続けただけでなく、表立って直接目に見える形にはならずとも、その講義の血肉となるような体系的な研究を数多く重ねていました。これは特に、シューベルトの専門分野である東洋学の領域において顕著でした。彼はアラビア語、（中世）ペルシャ語、サンスクリット語を読み書きし、ラテン語とギリシャ語に精通していたのは言うまでもなく、たゆまぬ研鑽によって中国語の広範な知識も身につけていました。講義はドイツ語、英語、フランス語、オランダ語

で行われました。さらにスペイン語とイタリア語も独学で習得しており、この分野の専門家にふさわしく、必要に応じてその都度深く学び込んだその他の東洋言語については、言うに及びません。

こうした背景（東洋言語や古典語の深い知識）が、ルドルフ・シュタイナーの膨大な著作に対する彼の理解を支える土台となっていました。まだ「全集」の刊行など全く議論されていなかった時代に、彼がすでに目を通していなかったメモや講義の断片は、おそらくほとんど存在しないでしょう。そして読んだものはすべて、彼の卓越した記憶力のどこかに居場所を見出していました。それは引き出しの中にただしまい込まれるようなものではなく、すべてが互いにつながり合っている記憶でした。

シューベルトにとって、シュタイナーの膨大な講義録は、隅々まで知り尽くした一枚の「地図」のようなものでした。彼の精神の中で生き生きと息づくその地図には、彼にしか見えない緯線と経線（座標軸）が走り、そこには海や大陸、山脈、川、湖、そして都市が広がっていました。いわば一種の「全集」が、そのようなプロジェクトの実現がまだ誰も考えつかないほど前の段階から、彼の精神の中にはすでに確固たる現実として、別の形で存在していたのです。

彼の講義の素晴らしさは、華麗なレトリックにあるのではありませんでした。彼は思慮深く、淡々と語り、身振り手振りも少なく、聴衆に直接語りかけるような仕草もあまり見せませんでした。そのため、一部の人からはそれを欠点とみなされることもありました。しかし、彼の実践を何度も聴く機会に恵まれ、必ずしも平易とは言えないその説明を熱心に追おうとした人々は、知識の面でも判断力の面でも、一切の強制を感じさせない自由なやり方で、計り知れないほど豊かな実りを得ることになったのです。

シューベルトの講義スタイルは、ルドルフ・シュタイナーのそれと似ていました。常に大きな視点から個別のテーマにアプローチし、それを周回するように様々な角度から光を当て、時には現代の差し迫った状況からスポットライトを浴びせ、そして聴衆をそっと最初の出発点へと連れ戻すのです。その目的、そして実際に得られる成果は、常に「意識の地平を広げること」にありました。シュタイナーと同じように、シューベルトも繰り返すことを厭（いと）わず、聴衆が事実の詰め込みで過負荷になることは決してありませんでした。歳月を経て、これらの講義はますます一種の「芸術作品」のようになっていきました。その淡々とした語り口の奥から、芸術的に構築された思想の建築物を、誰もが感じ取ることができたのです。

また、彼の講義に素晴らしい価値を与えていたのは、歴史、政治、社会学、国民経済学、そして東洋に関するあらゆる分野の新刊書を常に読み続け、最新の動向を把握していたことでした。これにより、現代の最も重要な著者たちの最新の知見を、いつでも自分の講義に組み込むことができたのです。そのため、彼は人智学を「閉じた世界観」や単なる「過去の歴史」として伝える危険に陥ることはなく、常に「現代との生きた対話・対峙」の中に人智学を位置づけることができました。

シューベルトが出版物のために書いたものはごくわずかであり、実質的には初期のいくつかの論文に限られます。それにもかかわらず、彼の遺品には、多種多様な研究の成果である膨大な記録が残されています。それらは無数の大小さまざまな用紙に整然とした筆跡で書き残され、彼自身の手によってタイトル付きのファイルに分類・整理されていました。これらの紙面からは、寛大で、秩序を重んじる精神が雄弁に伝わってきます。

シューベルトは文章を書く際、常に最も簡潔な表現を模索していました。 彼は無駄のない短さを好み、生来どちらかと言えば寡黙な性質であったため、不必要な言葉を費やすことは彼には不可能なことでした。彼は書き言葉の表現に対して非常に高い基準を課していたため、自分自身の執筆に満足できず、書くこと自体が自分に適した表現形式ではないと考えるようになり、やがて執筆活動をやめてしまいました。

しかし、彼が若い頃に主に雑誌などのために書いたわずかな文章は、彼の人間性を実に見事に象徴しており、内容も極めて深いものであるため、再び陽の目を見る価値が十分にあります（巻末の参考文献の一覧を参照）。特に特筆すべきは、1928年に彼が手がけた『ヨハネによる福音書』の翻訳です。

シューベルトの確かな判断力、沈着冷静さ、そして控えめな立ち振る舞いは、若い頃から彼に「優れた人格者」という名声をもたらしていました。多くの人々は彼を「賢者」とみなしていました。なぜなら、彼は膨大な知識を持ちながらも世俗から退いて暮らし、余計なことは一切口にせず、あらゆる物事に対して常に高い基準を適用する習慣があったからです。彼は周囲から絶大な信頼を寄せられていました。ルドルフ・シュタイナーの没後、人智学協会を根底から何度も揺るがした悲劇的な内紛に、彼は深く巻き込まれることになります。本来、彼にとって論争や対立的な議論は心の底から嫌悪すべきものでした。しかし、入念な検証の結果として彼自身が「真実」であると認めたものは、彼にとって何よりも優先されるものであり、そのためには毅然とした態度で臨みました。

こうした経緯から、彼は先述の紛争に関連して執筆された『覚書 1925-35（Denkschrift 1925-35）』というパンフレットの作成に協力することになります。その後、協会の状況が変わったことで、署名者の大半は10年以上が経過した後にこの文書から距離を置く（署名を撤回する）ようになりました。しかしシューベルトは、この文書から自身の署名を決して撤回しませんでした。ここに彼の非常に特徴的な人柄が表れています。彼はこの文書を、当時必要とされた「闘争のための書」であると位置づけていました。古い諍いを再び掘り起こすつもりは毛頭なかったものの、一度は確信を持って主張し、そこに記された事実関係についても依然として正しいと信じている事柄を引っ込めるには、彼はあまりにも「歴史家」としての気質が強すぎたのです。彼は本書の筆者に対し、「事実は取り消すことなどできないのだから」と語っていました。

その10年後、彼は再び別の紛争において立場を鮮明にしなければならない状況に直面します。いわゆる「遺稿管理権をめぐる紛争（Nachlaßkonflikt）」において、当初は仲介者として選ばれたものの、彼はすぐに調停が不可能であることを確信しました。その結果、彼はある特定の事実を人々の記憶に呼び起こす必要性に迫られます。これが、小冊子『遺稿問題の評価に向けて（Zur Beurteilung der Nachlaßfrage）』として結実しました。彼ほどこの問題の内情に精通している人物はいなかったため、彼の証言は極めて重大な意味を持ちました。しかし彼個人にとっては、この一件によって数多くの友人を失い、それまでの生活全般の変更を余儀なくされるという結果をもたらしました。

マリー・シュタイナーが常に彼に寄せていた信頼と敬意により、彼は1948年に講義の拠点をマリー・シュタイナーの邸宅であるドルナハの「ルドルフ・シュタイナー・ハルデ（Rudolf Steiner-Halde）」へと移しました。そして、ルドルフ・シュタイナー遺稿管理委員会のスタッフとして、著作の出版、とりわけ「全集（Gesamtausgabe）」の編纂・構築に携わることとなったのです。

ここでシューベルトの具体的な業績について一つひとつ語ることは、その膨大さゆえに不可能です。彼が特に精通していた特定のテーマは、彼の著作の参考文献一覧から窺い知ることができますが、それらの執筆活動は実質的に1928年で途絶えています。その後、彼の持つすべての知識は、40年間にわたり講義活動という形で注ぎ込まれることになりました。彼の真のテーマは常に「ルドルフ・シュタイナーの著作」でした。彼はその根底にある方針、主要テーマ、ライトモティーフなどを、見事な手腕で、かつ聴衆を常に触発するようなやり方で提示することができました。先述の専門分野（東洋学）に加えて、彼はとりわけ哲学、歴史、政治、社会科学、そして神秘学に通じていました。さらに、数学やその周辺分野の研究にも深く打ち込んでいました。

彼の精神は驚くべきほどの柔軟性と活発さを備えており、その精神的な躍動があったからこそ、外的な動き（活動的な外出など）をほとんど必要としませんでした。彼はパスカルのように、「人間の不幸の大部分は、部屋でじっと静かに過ごすことができないために起こる」と言うことができたかもしれない人物でした。

遺稿管理委員会にとって、シューベルトの旅立ちは取り返しのつかない大きな損失です。 なぜなら、編集・出版における困難な問題に直面した際、私たちはいつでも彼に意見を求めることができ、そして常に、客観的で確固たる根拠に基づいた回答を得られるという安心感があったからです。私たちは、ただ深い感謝の念をもって彼を追悼するほかありません。

○・ギュンター・シューベルトの論文・著作の参考文献一覧

「世界秩序とワシントン 」
（Wereldordening en Washington）
• 『アントロポゾフィー：社会・教育・精神科学雑誌』
（Anthroposophie, Maandblad voor sociale,
paedagogische en geesteswetenschappelijke vraagstukken）
・ユトレヒト、第1巻（1922年）、第1号（1月号）

「アントロポゾフィーと歴史」
（Anthroposophie en Geschiedenis）
• 『アントロポゾフィー月刊誌』 （Anthroposophie, Maandblad）
• 第1巻（1922年）、第3号（3月号）

「宗教とアントロポゾフィー 」
（Godsdienst en Anthroposophie）
• 『アントロポゾフィー月刊誌』 （Anthroposophie, Maandblad）
• 第1巻（1922年）、第4号（4月号）

「語る存在としての人間」
（De Mensch als sprekend wezen）
• 『アントロポゾフィー月刊誌』 （Anthroposophie, Maandblad）
• 第2巻（1923年）、第11号（11月号）

「「宗教科学者」たちの誹謗中傷の対象としての「聖霊」」
（Der «Heilige Geist» als Verleumdungsobjekt für «religiöse Wissenschaftler»）
• （ハンス・ライゼガング著『聖霊』に関する考察）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第3巻（1923/24年）、第8号（9月30日号）

「イランの英雄伝説」
（Die iranische Heldensage）
• 『ディ・ドライ（三者）』 （Die Drei）
• 第5巻（1926年）、第10冊（1月号）

「ウラジーミル・ソロヴィヨフの魂の伝記より」
（Aus der Seelenbiographie Wladimir Solovjeffs）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第5巻（1926年）、第11号（3月14日号）

「古い科学と新しい科学」
（Alte und neue Wissenschaft）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第5巻（1926年）、第9号（2月28日号）

「新しい美学の試み」
（Essai d'une Esthétique Nouvelle）
• 『精神科学』 （La Science Spirituelle）
• 第5巻（1926年）、第6号（4月号）

「エーテル種に対するインドの名称」
（Indische Bezeichnungen für die Ätherarten）
• 『ガイア・ソフィア』：ドルナッハ・ゲーテアヌム自然科学部門年報
（Gäa Sophia, Jahrbuch der Naturwissensch.
Sektion am Goetheanum, Dornach 1926） 342頁

「エジプトの宇宙創成論」
（Die ägyptische Kosmogonie）
• 『ダス・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第6巻（1927年）、第10号（3月6日号）

「アリストテレスのカテゴリー論 」
（Die Kategorien des Aristoteles）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第6巻（1927年）、第43号（10月23日号）

「ヨハネによる福音書」（翻訳）
（Das Johannes-Evangelium <Übersetzung>）
• 哲学的・アントロポゾフィー的出版社（ドルナッハ）、1928年刊
（Phil. Anthr. Verlag, Dornach 1928）

「ブルクハルトにおける衰退の問題」
（Das Dekadenzproblem bei Burckhardt）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第9巻（1930年）、第12号（3月23日号）

「宗教史的考察」
（Religionsgeschichtliche Betrachtungen）
• （F・アイマン著『キリスト教とキリスト教以前の諸宗教』に関する考察）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第11巻（1932年）、第3号（1月17日号）

「人類進化における建設的・破壊的力：講義要旨（H. W. W. 記）」
（Aufbauende und zerstörende Kräfte in der Menschheitsentwickelung,
Referat eines Vortrags <H. W. W.>）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第19巻（1940年）、第32号（8月4日号）

「世界史の諸時代：2つの講義の要旨（A. H. 記）」
（Epochen der Weltgeschichte, Referat zweier Vorträge <A. H.>）
• 『ダース・ゲーテアヌム』 （Das Goetheanum）
• 第20巻（1941年）、第50号（12月14日号）および 第52号（12月28日号）

「ヴィルヘルム・R・ネデラを偲んで」
（In memoriam Wilhelm R. Nedella）
• 『アントロポゾフィー協会動向』会員向けニュースレター
（Was in der Anthroposophischen Gesellschaft vorgeht,
Nachrichten für deren Mitglieder）

・第19巻（1942年）、第2号（1月11日号）

「世界と人類の進化における根本衝動：講義要旨（フレート・ペピッヒ記）」
（Grundimpulse der Welt- und Menschheitsentwickelung, Referate ）
・『一般アントロポゾフィー協会会員報告』
（Mitteilungen für die Mitglieder
der Allgemeinen Anthroposophischen Gesellschaft）
第11巻（1949年）、第10号（10月号）および 第11号（11月号）

「「遺稿問題」の評価について」
（Zur Beurteilung der «Nachlaßfrage»）
・一般アントロポゾフィー協会会員向け配付原稿（私家版）、1947年
（Manuskriptdruck für die Mitglieder
der Allgemeinen Anthroposophischen Gesellschaft, 1947）

○ギュンター・シューベルトの生涯からの一つのエピソード
（※オッセンドフスキ事件）

若き日のギュンター・シューベルトは、前代未聞の文学的詐欺（盗作事件）を暴いたことがあります。

1920年代の初頭、フェルディナンド・オッセンドフスキという人物が書いた『獣・人・神（Tiere, Menschen und Götter）』という本が世界中で大評判となりました。それは極東からの旅行記と称するもので、チベットやモンゴルにあるとされる神秘についてのセンセーショナルな報告などが含まれていました。著名な科学者たちからも真に受けられ、文学的にも巧みに構成されていたこの本は、またたく間に世界を駆け巡り、多くの言語に翻訳されました。

高名なスウェーデンの地理学者でありアジア探検家でもあるスヴェン・ヘディンは、該当する地域を自身の調査から熟知していたため、これが詐欺であり、著者が現地に赴いてさえいないことを見抜いていました。しかし、ヘディンによる告発の試みは成功しませんでした。なぜなら、オッセンドフスキとその友人たちが世論を味方につけていたからです。スヴェン・ヘディンは論争に巻き込まれ、多方面から攻撃を受けることになってしまいました。

1924年4月12日、雑誌『ゲーテアヌム』にアルベルト・シュテッフェンによる、オッセンドフスキの本に捧げられた一本の記事が掲載されました。そこには次のように書かれていました。

「若き言語学者であるギュンター・シューベルトが、14年前に出版されたサン＝ティーヴ・ドルヴェードルの著書『インドの欧州への使命（Mission de l'Inde en Europe）』に、私の注意を向けさせてくれた……」

アルベルト・シュテッフェンは、これら2冊の本からいくつかの文章を比較することで、オッセンドフスキの本がサン＝ティーヴの盗作に基づいていることを証明したのです。

この記事がスヴェン・ヘディンのもとに届き、彼はオッセンドフスキに対して効果的に反撃するための武器を手に入れることになりました。ヘディンは『オッセンドフスキと真実（Ossendowski und die Wahrheit）』（ライプツィヒ、1925年刊）を著しました。その80ページには次のように記されています。

「1924年10月中旬、私は『ゲーテアヌム』誌に掲載されたアルベルト・シュテッフェン氏の記事を知った。シュテッフェン氏はこう述べている。『若き言語学者であるギュンター・シューベルトが、14年前に出版されたサン＝ティーヴ・ドルヴェードルの著書「インドの欧州への使命」に、私の注意を向けさせてくれた』

つまり、この偽装を発見したのはギュンター・シューベルト氏だったのである。 もし彼がいなかったら、ヨーロッパやアメリカの何十万人もの『教養ある人々』が、モンゴル人たち――それも、単に文献を読み込みガンジュールやタンジュール（チベット仏教の大蔵経）に精通したラマ僧だけでなく、草原の最も素朴な羊飼いに至るまで――がインドの神秘主義や神智学に染まっていると、今でも信じ込んで歩き回っていたかもしれない。なぜなら、元となったその文献は、一部の秘儀に通じたサークル（特にフランス）の外部ではほとんど知られていなかったからだ。ここストックホルムの、本来であれば極めて蔵書が豊富な王立図書館にさえ、その本は欠けていた。私は最高の文学史家たちに尋ねてみたが、彼らはその本のタイトルも、著者の名前も、一度も耳にしたことがなかった。最終的に私は書店を通じてパリに注文し、ようやくそれを手に入れた。同時に、F・A・ブロッホハウス社からも2冊目の複本を受け取った。

シュテッフェン氏が3、4の類似点を挙げるにとどまったのに対し、私はオッセンドフスキ氏の著書の第5部について詳細な検証とフランスの著作との比較を行った。その結果、私はこれが完全な盗作であり、『神秘の中の神秘』が初めから終わりまで盗まれたものであることを確認できた。唯一の違いは、舞台がインドからモンゴルへと移されている点だけだった。その本の完全なタイトルは『Mission de l'Inde en Europe, Mission de l'Europe en Asie. La question des Mahatmas et sa solution（インドの欧州への使命、欧州のアジアへの使命。マハトマ問題とその解決）』である。」
（パリ、ドルボン・アイネ書店刊）」

世界中の無数の読者の中で、この文学的詐欺を見抜くことができたのが彼ただ一人であったという事実は、シューベルトの博覧強記ぶりと並外れた記憶力だけでなく、彼の優れた洞察力をも証明しています。

この事件の全容には政治的な思惑も絡んでいましたが、ここでは深く立ち入る必要はないでしょう。象徴的なのは、オッセンドフスキのこの粗悪な著作が今でも増刷され続けている一方で、サン＝ティーヴ・ドルヴェードルはかつてないほど忘れ去られているということです。

R・フリーデンタール

■ギュンター・シューベルトについて②

・ヘラ・ヴィースベルガー
「ギュンター・シューベルトの論文に寄せて」
・ギュンター・シューベルト
「アリストテレスのカテゴリー論」
（ヘラ・ヴィースベルガーによる補足説明付き）

●ヘラ・ヴィースベルガー
「ギュンター・シューベルトの論文に寄せて」

〔訳註：ヘラ・ヴィースベルガー（Hella Wiesberger、正式名 Helene Anna Wiesberger）：1920年10月20日-2014年12月13日。ルドルフ・シュタイナーの全集（Rudolf Steiner Gesamtausgabe、GA）の長年の編集者・研究者〕

ルドルフ・シュタイナーの「物理的・精神的世界のあらゆる秘密は、世界のアルファベットとしてのこれらの単純な概念の中に含まれている」という言葉を背景とした「カテゴリー論とその解釈」は、ギュンター・シューベルトの精神的探求を方向づけた主要な動機の一つでした。彼はこの認識上の課題を解決するために、常に新たな視点から繰り返しアプローチするよう方向づけられていたのです。例えば、このテーマは彼の妻でありオイリュトミストでもあったイローナ・シューベルト（Ilona Schubert）との数十年にわたる共同研究の対象でもあり、彼女はこれらの研究成果を自身のオイリュトミーの指導活動に役立てるよう尽力しています。

私たちがギュンター・シューベルトを重要な精神的指導者として体験できたのは、「具体的な現象を強く見つめる意識」と、「根本的な概念や原理へと深く踏み込もうとする同じくらい強い意志」が、稀に見る形で結びついていたからでした。彼は、アリストテレスのカテゴリー論、ユダヤのセフィロトの木（生命の樹）、あるいは古代の黄道十二宮の捉え方の根底にあるような「原概念（Urbegriff）」を用いて、世界の諸現象を認識によって貫き、見通そうとしたのです。

シューベルトのこの原概念への探求は、自身の研究についてルドルフ・シュタイナーと交わすことができた対話によってさらに深められました。シュタイナー博士はその際、彼に「中国語」や、子音が12個しか存在しない「フィンランド語」に目を向けるよう指示し、「音と黄道十二宮との正しい対応関係を見つけ出さなければならない」と指摘しました。これは、いわゆる「音声オイリュトミー・コース」の直後のことでした。

これを受けてシューベルトはシュタイナー博士に次のように問いかけました。「しかし博士、あなたはちょうど今、オイリュトミー・コースの中で私たちにその対応関係を提示されたばかりではありませんか？」するとシュタイナー博士はこう答えました。「いや、それはオイリュトミーのようなものに対して可能な『一つの側面』にすぎない。絶対的なつながりというものは、言葉では伝えることのできない神聖な秘密なのだ。しかし、あなた自身でそれに取り組み、見つけ出そうとしてみなさい。それが正しいかどうかは、後で私が伝えてあげられるから」

アリストテレスのカテゴリーを「世界のアルファベット」とするシュタイナーの先述の言葉と結びついた、このギュンター・シューベルトとルドルフ・シュタイナーとの最後の対話は、シューベルトにとって「カテゴリーと黄道十二宮の対応関係」および「それに伴い必要となるカテゴリーを12の要素へと拡張・補完すること」の足跡を追いかける最大の動機となりました。

その3年後、ギュンター・シューベルトは週刊誌『Das Goetheanum（ダス・ゲーテアヌム）』に以下の論文を寄稿しました。これが、この認識の問いに関する彼の研究が書き残された、最初で（残念ながら）唯一の普遍的なテキストとなったのです。

●ギュンター・シューベルト
「アリストテレスのカテゴリー論」

○基本的な視点

ギュンター・シューベルトの論考は、
アリストテレスの「10のカテゴリー（範疇）」を、
単なる論理学の道具としてではなく、
古代の宇宙観・世界観（特に「10」という数に基づく
統合的な根源理解）との連続性の中で位置づけ直す試みである。

アリストテレスのカテゴリー論は、
プラトン的な「像」による認識から抽象的・概念的な思考への移行を象徴し、
人類の意識史の転換点に立つ。
しかしそれは「前キリスト教的」な統一的根源に基づくもので、
生成（Werden）の原理や三位一体的な展開を十分に捉えきれない。
そこでシューベルトは、フランツ・ブレンターノによる
カテゴリーの数・本質・配列の解明を基盤としつつ、
古代ユダヤのセフィロト（10の生命の樹）や
黄道帯の古い10分割との対応を示し、さらに
ルドルフ・シュタイナーの人智学（ゲーテ的変容論と認識論）を通じて
「本質（Wesen）」と「現象（Erscheinung）」という
2つのカテゴリーを加えることで、現代的な12分割（黄道十二宮）と
キリスト教的な三位一体的世界生成へと接続する。

テーマの核心は、「10」から「12」への移行を、
人間の意識進化（霊視の喪失と新しい明晰な自己意識の獲得）と
世界生成の科学として読み解く点にある。
カテゴリーは静的な分類ではなく、実体から関係へ、
時間・空間・量・質・能動・受動などを通じて展開し、
最終的に自己意識を持って宇宙と再統合するプロセスとして理解される。

○要点

・カテゴリー論の歴史的位置づけと謎：

アリストテレスは「論理学の父」であり、
カントもアリストテレス以降本質的な進歩はなかったと評した。
しかしカテゴリーの数（10かそれ以外か）、
本質、相互関係は著作中に明確に示されておらず、古代から議論が続いていた。
ブレンターノ（1862年）がトマス・アクィナスの注釈を再評価し、
アリストテレス哲学全体から「数・本質・配置」を導き出した。

・10のカテゴリーの配列（ブレンターノによる）：

実体（Substanz）と関係（Beziehung）が
両端に独立して位置し、その間にペアが形成される。
時間（Zeit）と空間（Raum）、
量（Quantität）と質（Qualität）、

能動（Tun）と受動（Leiden）、
状態（Verhalten／有・所有）と位置（Lage／姿勢）。
普遍的な実体が時間・空間に顕現し、量・質に分化し、
能動・受動を経て状態・位置を定め、全体との関係を再構築する、
という包括的な説明が可能になる。

・古代の「10」との対応：

セフィロト（ケテル＝原初の実体からマルクト＝自我を持つ人間まで）や、
天秤座追加以前の黄道帯10分割
（乙女座と蠍座が統合されていた時代）とつながる。
蠍座（実体）、獅子座（時間）、牡牛座（質）、水瓶座（状態）などの
不動宮との対応も示される。
これは「ひとつの統合体」としての根源理解（前キリスト教的）を反映する。
バビロニアやロムルス暦（10ヶ月）にも痕跡がある。

・12への拡張と人智学的深化：

キリスト教的三位一体（父・子・聖霊）は、悟性認識だけでは捉えられず、
スコラ学も完全には統合できなかった
（869年コンスタンティノポリス公会議でのトリコトミー拒絶など）。
生成の原理そのものはカテゴリー論では捉えられない。
ゲーテの変容論を世界全体に展開したシュタイナーが、
「本質」と「現象」を加えることでこれを補う。
実体（蠍座）と時間（獅子座）の間に、
天秤座（本質／実在論）と乙女座（現象／現象論）が位置づけられる。
これらは人間内部では自我の存在・意識・純粋な思考として働き、
聖霊を通じてキリストを理解する道筋となる。

・対応スキーマ（黄道十二宮・セフィロト・カテゴリー・世界観）：

例として、蠍座＝ケテル＝実体（力本論）、天秤座＝本質（実在論）、
乙女座＝現象（現象論）、獅子座＝コクマー＝時間（感覚論）など。
なお、双子座と射手座については後にシューベルト自身が修正を加え
（数学論を関係に、量を射手座に対応させるなど）、
シュタイナーの認識論を通じた検証可能なアプローチを模索した。

・全体：

人智学は「天秤を持つ乙女」の姿で、古い霊視の喪失後の新しい人間認識を完成させ、
世界生成の変容を把握可能にする。
カテゴリーは創造原理としての実体から始まり、
現象としての展開を経て、自我が宇宙と再び結びつくプロセスを描く。

○本文

　アリストテレスのカテゴリー論は、人類の思想史において極めて重大な役割を果たしてきたにもかかわらず、アリストテレス哲学の中で最も理解されていない部分の一つに数えられます。古代の文献からも明らかなように、この理論にはその登場の当初から、どこか謎めいたものが付きまとっていました。そもそもアリス

トテレスが一体いくつのカテゴリーを立てたのかという問いでさえ、何世紀にもわたって繰り返し議論の的となってきたのです。彼が遺した著作の中には、この点に関する明確な言及は見当たりません。

この問題に対し、緻密な研究に基づいて、カテゴリーの「数」「本質」「配置」がアリストテレス哲学の全体からどのように導き出されるかを初めて明らかにしたのが、フランツ・ブレンターノでした。彼は1862年に出版した著書『アリストテレスによる存在の多義性について（Über die mannichfache Bedeutung des Seienden nach Aristoteles）』の中でそれを示したのです。ブレンターノのこの見解を支えたのは、彼が歴史上初めて再評価したトマス・アクィナスによるアリストテレス註解でした。トマスによる簡潔な解説の奥には、まさにブレンターノが依拠したのと同じ原理が息づいており、ブレンターノは詳細な論証と多角的なアプローチによって、それが正しいものであることを証明したのです。

ブレンターノによるこれらの研究は、私たちがカテゴリー論をより深く理解するための、次なる強固な基盤となり得るものです。

紀元前4世紀に生きたアリストテレスは、純粋な「悟性認識」の土台の上でのみ可能となった、ある意識展開の出発点に立っていました。アリストテレス以降、抽象的な思考が人類の発展に本格的に導入されることになります。彼はまさに「論理学の父」であり、それも極めて包括的な意味においてでした。そのため、2千年もの時を経たのちにカントは、論理学の領域においてアリストテレス以降、彼が成し遂げた業績に対して本質的なものは何一つ付け加えることができなかった、と明言したほどです。

抽象的な概念によって思考する能力を、人類は、かつて人間が世界の出来事を「像」として捉えていた古い認識様式の変容によって獲得しました。（この意識の変遷に関する詳細な叙述は、ルドルフ・シュタイナーの著書『哲学の謎（Die Rätsel der Philosophie）』の第1巻に示されています）。

アリストテレスを、その師であるプラトンと比較すると、ここで言う認識の移行期が鮮明に浮かび上がってきます。プラトンが、人間の魂の本質、死と生、愛といった、存在の最も深い謎についての考察へと自らを高めようとするとき、彼はかつてギリシャやアジアの神秘主義の中で育まれた古い知恵の「像」へと立ち戻ります。彼の対話篇は、いわゆる「プラトン的神話」において頂点に達するのです。しかし、このような像的な認識様式はアリストテレスにおいて終焉を迎えます。歴史的には、新プラトン主義者のような、過去の形式を復古的に受け継いだ遅れてきた人々の中に、それがもう一度だけ浮上するにすぎません。

ここで起きているのは、人間の意識の中でどのように「認識」が成立するか、というその方法の変容です。かつては崇高な精神的存在として予感的に体験されていたものが、アリストテレスにおいては、明晰ではあるものの「生命を失った思考意識」の光の中へと入っていきます。この意識は、もはや世界の根源を像として体験するのではなく、「概念」として把握するのです。もはや神々の世界ではなく、概念の世界そのものが、その起源と分類について探求されるようになります。そしてそこでは、自分たちが扱っているものが「創造的な原理」であるという感覚はすでに薄れ始めており、概念は次第に、人間意識が世界を理解するための単なる「道具」へと変わっていきました。それらの概念は、一方ではあらゆる思考の行き着く先であり、他方では存在のすべてを把握することのできる（すなわち、それら以外には存在しない）10の基本概念、すなわち「カテゴリー（範疇）」*へと分類されることになります。

ブレンターノによって証明された「10」というカテゴリーの数は、古代の極めて多様な民族の間に存在していた、太古の自然観・世界観とのつながりを示唆しています。そしてそれは、古代ユダヤの教えである「10のセフィロト（生命の樹）」において最も容易にその足跡をたどることができます。概して次のように言うことができるでしょう。ルドルフ・シュタイナーが「第３後アトランティス文化期（エジプト・カルデア文化期）」と呼んだ時代において、星空、とりわけ黄道十二宮は、主要な神々の目に見える写し絵（像）として体感されていました。そして天文学史が教えるように、黄道十二宮の星座とそれに対応する神々は、当時は「10の要素」として定められていたのです。

この、12という数と並んで現れる「10」という数が、推測されるようにさらに遥か古い時代を指し示しているのかどうかは、外的な文献や手段だけでは確認できません。しかし、それはバビロニア文化の最も古い時代に明確に現れており、他の場所でも証明され、最終的には古代ローマの暦法におけるいわゆる「ロムルス暦（1年を10ヶ月とする暦）」の中にも生き残っています。今日でも使われている月の名称は、この古い10分割の形式を外的にとどめています。例えば、オクトーバー（October＝10月）は本来「第8の月」を意味し、ノヴェンバー（November＝11月）は「第9の月」、そして最後のディセンバー（December＝12月）は「第10の月」を意味しているのです。

その出発点は天文学に求められなければなりません。 この分野において、かつて黄道帯が10分割されていたのは、「天秤座」という星座が比較的のちになってから付け加えられたためであり、古い捉え方においては「乙女座」と「蠍座」がひとつのまとまりを構成していたからである、という事実はよく知られています。これら2つの星座の伝統的なシンボルマークである♍（乙女座） と♏（蠍座）は、その形状の共通性から、今でも外的に共通の起源を持っていたことを示しています。

このような捉え方の理由は、ユダヤ人の「10のセフィロト」が、原人間であるアダム・カドモン（Adam Kadmon）を形づくる生命の諸力と考えられていたことを考慮すると説明がつきます。アダム・カドモンとは、「失楽園」以前の人間を指します。当時、人間はまだ両性具有であり、まだ（アリストテレス的な）悟性認識を持っていませんでした。よく知られているように、蠍座は性的な原理と結びつけられる一方で、同時に「思考原理」をも表しており、この思考原理としての側面においては「鷲」のシンボルに置き換えることができます。失楽園ののちに両性が分離し、それまでの統合された「M」の形から、♍（乙女座） と♏（蠍座）が生まれました。そして、その両者の間の均衡（バランス）をとるものとして「天秤座（♎）」が挿入されたのです。

したがって、ここでの本質は、「すべての最初であり最高位の原理として、内部に隠された『三位一体』を内包する『ひとつの統合体』」が想定されているという点にあります。これこそが、他のすべての事柄を理解するための鍵となります。これにより、黄道帯の星座とセフィロトとの間に、まず自然な関係性が生じます。ただし、この関係性は、例えば後世の「カバラ」において思索されているような結びつき方とは完全に異なります（これについては後述の図式を参照してください）。

さて、これと同じ視点からアリストテレスのカテゴリー（範疇）を配置しようとする際、まず直面する困難は、アリストテレスが遺した著作の中には、カテゴリーの順序や互いの関連性が明確に記述されていないという点です。ここでカテゴリーの数だけでなく、その由来と正しい順序をも再び突き止めたのは、ブレンターノの功績です。彼の見解の論拠は先述の著書に見出すことができるため、本考察の目的においては、その結論を提示するだけで十分でしょう。ブレンターノによれば、カテゴリーは以下のように分類されなければなりません。

まず、最初と最後に「実体（Substanz）」と「関係（Beziehung）」がそれぞれ独立して位置します。その他の要素は、次のように2つずつペア（対）を構成します。

「時間（Zeit）」 と 「空間（Raum）」

「量（Quantität）」 と 「質（Qualität）」

「能動（Tun＝作用）」 と 「受動（Leiden＝被作用）」

「状態（Verhalten＝有・所有）」 と 「位置（Lage＝姿勢）」

では、これらのカテゴリーは世界の存在について、いかに包括的に説明することができるでしょうか。

ひとつの普遍的な「実体」がすべての根底にあり、それは「時間」と「空間」の中で自らを顕現し、「量」と「質」に従って分化し、「能動」と「受動」を経て、正しい「状態」へと至ります。そして自らの「位置」を決定し、その最後の側面においては、全体（宇宙）との関係を再び構築し直した「閉じられた統合体」として自らを認識するのです。

太古の時代から、黄道十二宮の4つの主要な星座（不動宮）として、「蠍座」「獅子座」「牡牛座」「水瓶座」が挙げられてきました。アリストテレスのカテゴリーの中からも、これらに対応するものを抽出することができます。これら4つの最も本質的なカテゴリーは、根底にある「実体」について次のように述べています。

「実体は、最初は分化しておらず、すべてを内包している（蠍座）。それは「時間」を通じて現象世界に現れ（獅子座）、「質」においてより詳細に規定され（牡牛座）、「状態」において個体化され（水瓶座）、そして全体との関係を再び構築したのちに、自己意識を持って自らの根源へと帰還していく。」

人智学は、このカテゴリーと星座の対応という洞察をさらに深めることができます。

普遍的な世界の存在から、現在の世界の進化が現象として現れるのは、まず「土星紀」において、人間の心臓を構築する熱の中に「時間」が誕生するからです（獅子座、心臓）。次の「太陽紀」において「空間」が生まれ、「月紀」において測定する思考（計量思考）の基礎が築かれます。そして現在の「地球紀」にいたって、人間の本来の本質である「自我」が顕現し、それが普遍的な世界の「実体（Substanz）」に明確な「質」を与えます。

その後の発展は「能動（Tun）」と「受動（Leiden）」の中で繰り広げられ、それは「創造するロゴス」が「受難の神・人間」となるという人類の運命（キリストの受難）の中に表現されています。死と復活を経て、人類は自立した存在へと前進し、宇宙における自らの「位置（Lage）」とミッション（使命）を省み、自我意識の中で、かつてそこから「一見すると分離したかのように見えていた」世界宇宙と再び結びつくのです。

セフィロト（生命の樹）にも、これとまったく同様の発展プロセスが含まれています。

・「ケテル（Kether：王冠）」は、世界と人間の根底にある「原初の実体（Ursubstanz）」のように位置しています。
・それは神聖な知恵である「コクマー（Chokmah）」と、宇宙のインテリジェンス（叡智）である「ビナー（Binah）」によって捉えられます。
・次の段階は、偉大さを意味する「ゲドゥラー（Gedulah）」（アリストテレスの 量 ）と、強さを意味する「ゲブラー（Geburah）」（ 質 ）です。
・それに続いて、創造における美の顕現である「ティファレト（Tipheret）」（ 能動 ）と、死に対する生の勝利である「ネツァク（Nezach）」（ 受動 ）が来ます。
・「ホド（Hod）」は「存在（有）」に近いものを意味し、アリストテレスの『ἔχειν（エケイン：状態、有・所有）』と同じように、独特な翻訳の難しさを持っています。
・「イェソド（Jesod）」は土台・基礎を意味し、アリストテレスの『κεῖσθαι（ケイスタイ：位置、姿勢）』に相当します。
・「マルクト（Malkuth：王国）」は地上における天の王国、すなわち、世界宇宙とのつながりを自覚した「自我を持つ人間（Ich-Mensch）」を意味します。

◇

ここで私たちは、「新しい12分割」に対して「古い10分割」が持っていた意味とは一体何なのか、という問いに答えを出さなければなりません。

カテゴリー（範疇）にもやはり「12」という数があるべきではないでしょうか。そして、さらに2つのカテゴリーが追加されなければならないのではないでしょうか。もしそうなら、その2つとは一体何なのでしょうか。アリストテレス以降、カテゴリー論はどうなってしまったのでしょうか。

これらの問いには、ルドルフ・シュタイナーの教えから得られる「人類史への理解」を通じて答えることができます。ここでは、いくつかの原理的な事柄を指摘するにとどめます。

宇宙の原理、あるいは思考の原理を「10」として立てるか「12」として立てるかの違いは、最高位の世界原理に対して、私たちがどのような視点を取るかによって決まります。セフィロトの「10」という数や、アリストテレスの「10のカテゴリー」は、世界の根源を「ひとつの統合体」として捉える世界観の証しです。アリストテレス哲学も、古代ユダヤの世界観も、均一な一つの「根源（Urgrund）」から出発するという特性を持っています。大まかに言えば、これが「キリスト降誕前（前キリスト教的）」の捉え方です。

これに対して、キリスト教は「三位一体」の教えなしには考えることができません。しかし、この三位一体の教えは、人間の「悟性の働き」によって理解できるような事柄の枠には収まらず、むしろ「啓示による教義（ドグマ）」として信じられるべきものとされてきました。少なくとも、それが教会の見解であり、伝統的な哲学もそこから一歩も踏み出すことはありませんでした。これは一体どのように説明されるべきでしょうか。

かつて、神聖なる三位一体の秘密がその最後の残光の中で明かされた「古い霊視」は、人間に「自分が世界のどこから由来したのか」という自らの起源に関する認識をもたらすものでした。「世界を知ること」が「人間を知ること」へとつながっていたのです。

やがて「悟性認識」の時代が到来すると、その古い霊的なヴィジョン（ Geistesschau ）は失われ、人間は自分自身の力だけに頼らざるを得なくなりました。人間が再び包括的な世界認識へと到達できるようになるのは、この地上の意識（現代の明晰な自己意識）から出発する「新しい人間認識」が段階的に実を結んでからのことです。

しかし、まさに（古い霊視が失われ、新しい人間認識が始まるまでの）この過渡期に、キリストの地球での歩みが起こりました。初期のキリスト教徒たちは、そこに「ロゴス（子なる神）」の顕現を見出していました。そして、「子（キリスト）」と「父（神）」、そして「聖霊」との関係は、人間が自らの本質の中に「神聖なる三位一体の力」を認識できて初めて理解できるものなのだ、ということを知っていたのです。キリストは「復活」を通じて人間の肉体（ Leib ）を救う救世主として認識され、父なる神は人間精神（ Geist ）の原初なる泉として、そして聖霊は人間の魂（ Seele ）を目覚めさせる存在として認識されました。

しかし、人類の「思考（Denken）」は、当初このキリスト衝動を受け入れることができませんでした。アリストテレス哲学をキリスト教的な哲学へと高めようとした、あのスコラ学の壮大な試みでさえ、最終的には失敗に終わる運命にありました。トマス・アクィナスは、三位一体の教えを「啓示という高み」から「人間の認識生活（日常の思考）」の地平へと引き降ろしてくることができなかったのです。教会は三位一体のドグマ（教義）を神聖な伝統として守り続けましたが、その一方で、869年のコンスタンティノポリス公会議（第4回コンスタンティノポリス公会議）以来、いわゆる「トリコトミー（人間三分説：人間を肉体・魂・精神の3つの要素からなる存在とする捉え方）」を異端として退けてしまいました。

人間を「肉体的（leiblich）」「魂的（seelisch）」「精神的（geistig）」な存在として捉えることが禁止されたため、真の意味での「キリスト教的哲学」へと到達することは不可能となってしまったのです。その結果、キリスト教は単なる「信仰の事柄」にとどまり、人間の思考にとっては理解しがたい、異質なものとなってしまいました。これがカテゴリー論（範疇論）に対して意味したのは、その理論の中に「神聖なる三位一体」も「人間の三位一体（肉体・魂・精神）」も組み込むことができなくなった、ということでした。

アリストテレスの（10の）カテゴリーを用いれば、世界がどのように神聖な原初の泉から生じたのか、また、世界がいかにして様々な側面からその展開を観察できる「生成されたもの（歴史的に形づくられたもの）」であるかを理解することは可能です。しかし、「生成（Werden：変化し、生成発展していくこと）」の本来の原理そのものは、そこでは認識されません。

この「生成」というプロセスを認識によって把握しようとした人類最初の試みが、ゲーテの変容論（Metamorphosenlehre：植物変容論など）です。これこそが、まさに「キリスト教的思考」の端緒とみなされなければなりません。そのようなものとして、ゲーテの試みは歴史の中で唯一無二の光を放っています。

しかし、ゲーテ自身はその試みを全領域にわたって遂行したわけではありませんでした。彼が特定の限定された領域（植物学や色彩学など）で成し遂げたことを、世界全体のために完成させたのが、ルドルフ・シュタイナーでした。人智学は、この「変容（メタモルフォーゼ）の思想」を多角的に徹底して遂行することにより、「世界生成の科学（Wissenschaft des Weltenwerdens）」へと昇華したのです。ルドルフ・シュタイナーの哲学の中には、これまで欠けていた「2つのカテゴリー」が隠されています。 シュタイナー博士自身はそれらをあえて「カテゴリー」という言葉では呼びませんでしたが、私たちはそこにそれらを見出すことができるのです。

ルドルフ・シュタイナーは、自身が編纂した『ゲーテ自然科学論文集』への導入部（初学者への手引き）の中で、「時間」の概念について語り（第3巻）、次のように述べています。

「ここで私たちは、事物の『本質（Wesen）』が『現象（Erscheinung）』として立ち現れるその場所に、初めて『時間』が登場するのを見るのである」

そしてシュタイナーは、自身の考察を次のような言葉で結んでいます。「これによって私たちは、いまだほとんど理解されていない2つの概念、すなわち『本質』と『現象』という概念に、同時に光を当てたことになるのである」

また、講義録『人間と思考・宇宙思考（Der menschliche und der kosmische Gedanke）』の中で、シュタイナー博士は、人間の世界観として表現される「12の宇宙思考（Weltgedanken）」について語っています。これらは黄道十二宮の12の星座と明確な対応関係を持っています。そこでは、「乙女座」のサインには「現象学（Phänomenalismus＝世界を現象として捉える世界観）」が属し、「天秤座」のサインには「実在論（Realismus＝世界を本質的なものとして捉える世界観）」が属しているとされています。

したがって、アリストテレスのカテゴリーである「実体（Substanz）」と「時間（Zeit）」の間、すなわち「蠍座」と「獅子座」の間には、「本質（Wesen）」と「現象（Erscheinung）」というカテゴリー、すなわち「天秤座」と「乙女座」が位置しているのです。

以下の図式（スキーマ）には、これらすべての相関関係が含まれています。

〔黄道十二宮〕〔セフィロト〕〔カテゴリー〕〔世界観〕

1. 蠍座	ケテル	実体（創造原理）	力本論
2. 天秤座	—	（本質）	実在論
3. 乙女座	—	（現象）	現象論
4. 獅子座	コクマー	時間	感覚論
5. 蟹座	ビナー	空間	唯物論
6. 双子座	マルクト	関係	数学主義
7. 牡牛座	ティフェレト	行為	合理主義

8. 牡羊座	ゲブラー	質	観念論
9. 魚座	ネツァク	受動	心理主義
10. 水瓶座	ホド	状態	霊気論
11. 山羊座	イェソド	位置	唯心論
12. 射手座	ゲドゥラー	量	単子論

［編集注記］

・双子座（Zwillinge）と射手座（Schütze）のサインに対応づけられているセフィロトおよびカテゴリーは、ここでは――雑誌『Das Goetheanum（ゲーテアヌム）』に掲載された初版（初出）の記述とは異なり――ギュンター・シューベルト本人の個人的な指示（口頭伝達など）に基づいて、前後の配置が入れ替えられています。（これについては、G・シューベルトの論文に対する補足説明を参照してください。）

・「実体（Substanz）」「本質（Wesen）」「現象（Erscheinung）」は、人間認識が神聖なる三位一体（トリニティ）の高みへと自らを高めるための基本概念です。

父なる神が、世界の生成のために普遍的な「実体」を与え、
子なる神（キリスト）が、それを「本質」へと形づくり、
聖霊（精神の神）によって、それが「現象」として立ち現れます。

これらは人間の内部においては、「自我の存在（Ich-Sein）」「自我の意識（Ich-Bewußtsein）」「純粋な思考（reines Denken）」として働いています。「そこからすべてが生成された」ロゴス（言葉）としての子なる神は、世界思考、すなわち聖霊の光の中で認識されるのです。

世界生成の変容（メタモルフォーゼ）を理解しようとするならば、私たちは「本質」と「現象」という概念への理解を深めなければなりません。それは人智学（アントロポゾフィー）を通じてのみ可能となることです。しかしそれは同時に、人類の探求の最終目的地、すなわち「聖霊（ Geist ）を通じてキリストを理解すること」へと私たちを導いてくれます。

こうして人智学は、現代の人類の前に、「天秤を持つ乙女（Jungfrau mit der Wage）」の厳かなる面（おももち）を湛えて立っているのです。

＊＊＊＊

〔ギュンター・シューベルトの論文への補足説明〕

それから何年も経ったのち、ある個人的な対話の中で、ギュンター・シューベルトは「かつて執筆した論文における『カテゴリーと黄道十二宮の対応関係』に、一部修正を加えなければならない」と説明しました。

当時、彼は「数学論」の本質は「量（Quantität）」のカテゴリーと一致するものと考えていました。しかしその後、彼は「数学論のカテゴリーは「関係（Beziehung）」であるべきであり、したがって「量」のカテゴリーは「射手座」に対応づけられなければならない」という確信に至ったのです。

ちょうどそれと同じ時期に、彼はこの冊子に収録されているルドルフ・シュタイナーの手記を目にすることになりました。これを受けて、彼は一連の講義を行い、そこでは特にオカルティズム（神秘学）の歴史家としての視点から、カテゴリーの問題にあらゆる角度から光を当てました。しかし同時に彼は、「これらすべては、まだ本当の意味での解決策を示しているわけではない。なぜなら、どのようにしてその結論に到達するのかという道筋が、依然として未解決の問いとして残されているからだ」という点も表明していました。

彼は歳月を重ねる中で、従来の歴史的なアプローチとは異なる、「現代の明晰な意識にとって完全にプロセスを検証可能な新しいアプローチ」を模索していました。そして、「認識の本質」をめぐる探求を通じて、彼はついに次のことに気がついたのです。すなわち、「ルドルフ・シュタイナーの『認識論』を用いることで、カテゴリー論の問題をも解決へと導く、完全にプロセスを見通すことのできる道筋を歩むことができる」ということです。

ここでギュンター・シューベルトが、全く異なる出発点から、全く異なる道のりを歩みながらも、彼自身が非常に高く評価していたシュタイナーのもう一人の重要な弟子、カール・ウンガー（Carl Unger）と思想的に出会っているのを見るのは極めて興味深いことです。シュタイナー自身もかつてシュトゥットガルトで行った講義の中で、ウンガー博士の認識論的な尽力について次のように称賛していました。

「そして、まさにここシュトゥットガルトに、この認識論の領域において極めて重要な意義を持つ一人の働き手（ウンガー博士）がいるということは、私たちの運動にとって一つの恵み深い潮流とみなされなければなりません。なぜなら、この人智学の運動がその最も深い部分において世界で認められるようになるのは、単に『高次元の世界の事実』だけを聞きたがる人々によってではなく、「高次元の世界で作業するための骨組みを創り出し、真に堅実な活動のためのリアルな基盤をもたらしてくれる、ある思考の精緻な技術」へと踏み込んでいく忍耐力を持った人々によってだからです」

この文脈において、ルドルフ・シュタイナーのもう一つの発言に触れておくことは、非常に意義深いことでしょう。 それはシューベルトにも特に深い感銘を与えた言葉でした。

他界されたグスタフ・トローベルク教授は、ルドルフ・シュタイナー生誕100周年に寄せた論文の中で次のように報告しています。かつてシュタイナーが「霊学研究における誤りの可能性」について尋ねられた際、彼はこのように答えました。

「私は霊学研究の成果として、それが真実であることを細心の注意を払って確認することなしに、何かを口にしたことは一度もありません。それでもなお、のちの、より完全な形で行われる研究が、私の述べたことのいくつかの点を修正する可能性があることは認めなければならないでしょう。しかし――私が唯一、決して間違えていないと断言できるものがあります。それは、私が哲学の根本問題に対して出した回答です。 それらは完全に明白ものとして証明されています」

さらに、シュタイナーはこう付け加えました。「もし私が――あくまで理論上の仮定ですが――この哲学の根本問題の領域で間違えていたと仮定するならば、人間にとって認識そのものがそもそも不可能であり、絶対的な懐疑主義と不可知論だけが正しかった、ということになってしまうでしょう」

◇

先述したカテゴリーに関する一連の講義の中で、ギュンター・シューベルトはアリストテレスのカテゴリーを、ルドルフ・シュタイナーの「認識論」の概念と結びつけて展開しようと試みていました。彼は主に、シュタイナーによる『ゲーテ自然科学論文集への導入部』、学位論文である『真理と科学（Wahrheit und Wissenschaft）』、そして1908年11月13日のベルリン講義を拠り所とし、それらを「世界と人間の認識のための原概念（Urbegriffe）」へと高めようとしたのです。

残念ながら、彼のこの具体的な思考プロセスをそのまま伝えるに足る十分な記録は残されていません。しかし、シューベルトによってこの「思考の試み」が行われたという事実そのものが、間違いなく重要な意義を持っています。おそらく、ここに記された示唆がきっかけとなり、この問題が他の人々によって受け継がれ、さらに発展させられていくことになるでしょう。

■ギュンター・シューベルトについて③

・ルドルフ・シュタイナー：
カバラに関する講義
（1904年3月18日、ベルリンにて。断片的な記録ノートに基づく）
・ヘラ・ヴィースベルガー：
『19世紀のオカルト運動とその世界文化への関係』の出版にあたって
―― 共同編集者ギュンター・シューベルトを追悼して

●ルドルフ・シュタイナー：
カバラに関する講義
（1904年3月18日、ベルリンにて。断片的な記録ノートに基づく）

○前書き

この講義には2つの異なる記録が残されています。ひとつは、フランツ・ザイラー（Franz Seiler）の速記ノートに基づくもの。もうひとつは、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルス（Marie Steiner-von Sivers）の手書きのメモに基づくものです。これら両者は、互いに補い合い、また内容を明確にし合う関係にあります。

以下には、より詳細に記されているザイラー版の記録を掲載します。マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスのメモから補足された箇所は丸括弧 ( ) で囲んで示し、点々 ... は記録者によって直接示された（聞き取れなかった、または書ききれなかった）欠落部分を表しています。

＊＊＊＊＊

●シュタイナーの講義記録・本文

私たちは、（神智学の教えに深く入り込めば入り込むほど）聖書をどこまでも深く、より深く理解できるようになるということを見てきました。しかし今日、皆さんに知っていただきたいのは、神智学的な叡智が何千年もの時を経てどのように受け継がれてきたか、そしてそれが様々な時代において、単に名称や言葉などの違いによっていかに異なる姿をとってきたか、という点です。

今日の概説では、古代のユダヤ人の間で教えられていた事柄を取り上げます。今日、「カバラ（Kabbala）」は、ユダヤ人の間でさえ、その深い知恵の面ではほとんど知られていないものとなってしまいました。しかし、それは時に、私たちが最も予想もしないような人々の間で今なお姿を現すことがあります

もし皆さんが、遠く離れたガリツィア（※現在のウクライナ西部～ポーランド南東部）からやって来た、あるユダヤ人の学者に出会ったとしましょう。彼は身なりには一向に頓着せず、近代文明に生きる人々からは一見して敬遠されるような人物かもしれません。しかし、そのような人物が、カバラの叡智の名残りを今でもなお保持しているという経験を、皆さんはすることになるかもしれないのです。オーストリアでは、こうした人々は「奇跡のラビ （Wunder-Rabbi）」と呼ばれています。なぜなら彼らは、ある種の外的な魔術的技法を心得ており、例えば、私たちの現代の医師たちよりも遥かに見事に「暗示」を操ることができるからです。彼らはある程度まで、実際に秘儀参入を遂げてさえいるのです。

これから、カバラに何が記されているかについてお話ししましょう。私の著書］[*] の中にも、それらの秘密の教えが、私たちが神智学の中で学んでいる内容と完全に一致していることを見出していただけるはずです。

※[*] この講義の直後、1904年5月に初めて出版された著書『神智学（Theosophie）』（GA 9）を指している。

カバラでは、世界の内側に「12の構成要素（階梯）」を区別します。

そのうちの「最初（第1）」と「最後（第12）」の要素は秘密（隠されたもの）とされます。なぜなら、それらはそもそも言葉で表現することが全く不可能だからです。言葉によって表現されるのは、残りの「10」の要素だけです。そして、この残りの10の要素は、次の「3つのグループ」に分類されます。

1）第一に、いわゆる「精神世界（霊界）」：純粋な精神的（霊的）本質たちの世界。

2）第二に、「魂の世界（アストラル界）」

3）第三に、「肉体世界（物質界）」

さて、カバラの教師は門下に入るすべての弟子に対して、開口一番このように告げます。「お前はこれら3つの世界のいずれをも、決して自分の『肉眼』で見ることはできない。お前が常に目にすることができるのは、ただ『王国（Malkuth / マルクト）』だけである」

この「王国」とは、私たちを取り囲んでいるこの現実世界のことです。カバラを学ぶ弟子は、「私は一人の人間を見ている」と言いますが、実際に目に見えているものは「王国」の中にあります。しかし真実においては、その人間は先述の「3つの世界（霊・魂・肉体）」の中に存在しているのです。人間には肉体があり、魂があり、精神があります。肉体を通じて呼吸し、栄養を摂取し、魂を通じて感じ、精神を通じて思考します。これらすべてが、ひとつの統合された全体として、すなわち「王国」として私たちの前に現れているのです。

これこそが、構成要素のなかの「第10の要素」にほかなりません。この第10の要素（王国）とは、残りの9つの要素が極めて多様な方法と様式によって集まって流れ込んだ、その「合流地点」なのです。

第一に、肉体（物質）の世界です。

肉体的なものには、さらに3つの構成要素（階梯）があります。あらゆる肉体（物体）は、それ自体として存在しています。もしそれ自体として存在していなければ、それはそもそもそこに存在していないでしょう。これが「基礎（イェソド）」です。

あなたがその物体にぶつかると、その「堅固さ」を感知します。これが「堅固（ホド）」です。

また、その物体があなたにぶつかるとき、あなたはその物体の「現れ（輝き）」を感知します。これが「輝き / 外見（ネツァク）」です。

したがって、肉体世界においては、「基礎」「堅固」「輝き（外見）」の3つが区別されます。

（ザイラー版の補足に基づく4つのセフィロトの数式）：

10：王国（マルクト / Reich）
9：基礎（イェソド / Fundament）
8：堅固（ホド / Festigkeit）
7：輝き / 外見（ネツァク / Schein）

第二に、魂の世界です。

ここにも同様に3つのセフィロトがあります。その最初のものは、私たちが現在、神智学の中で「共感」」と呼んでいるものであり、カバラが「愛（ティフェレト）」と呼んでいるものです。愛とは、魂の体が他の存在に出会ったときに外へと放つものです。物体の「堅固さ」が外に向かって私に迫ってくるのと同じように、「愛」とは私が外に向かって放つものなのです。

2番目のセフィロトは「慈悲（恵み）（ゲブラー / もしくはゲドゥラーの解釈）」です。これは、愛のように単に外へと放たれるだけのものではなく、すでにどちらかといえば内側に閉じられたもので、自分をそのまま差し出すのではなく、内側から分け与えるものです。

3番目のセフィロトは「正義（ゲドゥラー / もしくはゲブラーの解釈）」であり、（これは純粋に均衡・調和をもたらすものです）。

これらが、魂の領域における3つのセフィロトです。

6：愛（ティフェレト / Liebe）
5：慈悲（Gnade）
4：正義（Gerechtigkeit）

第三に、精神世界（霊界）のセフィロトです。

これらこそが、本来の「能動的な諸力」です。その最初のものを、カバラは「世界悟性（ビナー / Weltverstand）」と呼びます。2番目のものは「世界思考（コクマー / Weltgedanke）」であり、思考を宿す宇宙の叡智です。3番目のものは根源のセフィロトであり、カバラ学者はこれを「高み」あるいは「王冠（ケテル / Kether - die Höhe）」と呼びます。これは「世界悟性」と「世界思考」が統合されたものです。

3：世界悟性 (Weltverstand)
2：世界思考 (Weltgedanke)
1：高み / 王冠 (Kether - die Höhe)

これが「10のセフィロト」の全貌です。

ここでカバラの教師は弟子にこう告げます。「お前は、これら3つの世界のそれぞれから、一つの要素を自分の中に宿している。お前は肉体世界（物質界）から、自らの『植物的な魂（植物魂 / エーテル体）』を受け取っている。魂の世界からは『情熱の魂（アストラル体）』を、そして精神世界（霊の国）からは『思考する魂（自我・精神）』を受け取っているのだ」

「これこそが、ユダヤの秘密の教えの骨組みであったのです。

さて、私たちはキリスト教を一度飛び越えて、キリスト教初期の数世紀における、ある一人の神秘の教師のところで足を止めてみましょう。それは殉教者ユスティノス（Justinus der Märtyrer）です。彼はすべての弟子に対して、次のような神秘の教えの厳かな誓いを立てさせました。

「お前は、神聖にして根源的な秘密について語ってはならない。それらを世界の外へと持ち出してはならない。私たちの主がそれらを受け取った際に誓われたように、私たちの間でもまた、沈黙が守られなければならない」

これは、神秘というものはただ言葉で語れば済むというものではなく、それを内面で生き生きとさせなければならない、つまり『真理を生きる』べきであるということを意味しており、そこにこの誓いの重大な意義があります）。

今日に至るまで、フリーメイソンの本当の秘密を暴露できた者は誰もいません。それは暴露不可能なのです。なぜなら、その秘密は生きられるものであり、言葉で表現することはできないからです。

殉教者ユスティノスが弟子たちに与えた最初の物語（説話）は、以下のようなものでした。

「かつてヘラクレスは、エリテイア（Erychtheia）の島から……の馬を連れて立ち去り、スキタイの地へとやって来ました。彼はある草原で眠りにつき、自分の馬を傍らで放牧させておきました。やがてヘラクレスが目を覚ますと、自分の馬がいなくなっていることに気づきました。彼は馬を探しに行きましたが、見つけることができませんでした。

その代わりに、彼は一人の若い女性（Jungfrau）に出会いました。彼女は霊的な資質を備えているように見えたため、ヘラクレスは馬がどこにいるかを知らないかと尋ねました。すると彼女は、「私と愛の契りを結んで交わるならば、その馬の居場所を教えてあげましょう」と言いました。当時、ヘラクレスにとってその馬は何よりも重要なものであったため、彼はその契約に応じました。

その時、彼は恐ろしいことに気づきました。その若い女性は、身体の半分しか人間ではなかったのです。上半身は人間でしたが、下半身は蛇の姿をしていました。しかし、彼は彼女と愛の契りを結び、同時にそこで得た認識（予感）を彼女に告げました。「お前は私との間に3人の子供を産むだろう。その3人の子供たちは、世界の3つの根源（源泉）の名を冠することになる」と。

これが、殉教者ユスティノスが弟子たちに与えた最初の物語でした。弟子たちはこれについて深く沈思黙考（瞑想）しなければなりませんでした。

そうするうちに、弟子たちの一人ひとりに、この物語の中に何が隠されているのかが次第に明らかになっていきました。

まず、ヘラクレス自身が、ユダヤ・カバラにおける「王冠（ケテル）」の根源的な力を表しています。しかし、この根源的な人間であるヘラクレスは「眠って」います。すなわち、彼は自分が地上の性的な世界へと下降していく前に持っていた、あの「高次元の意識」を一時的に失ってしまっているのです。

そして、彼がその意識を失っている間に、彼を人生を通じて運んでくれるはずの「馬」が見失われてしまいます。人間は、最初の2つの根幹人類（※人智学の宇宙進化論における極性人類期・過渡的時期の人間）において、その高次元の馬（霊的な搬送力）を持っていましたが、それを失ってしまったのです。

そこで彼は、一人の若い女性に出会いました。彼女は二重の自然（性質）を持っており、半分は処女（人間）であり、半分は蛇でした。つまり、彼女は「精神的（霊的）な自然」と「肉体的（物質的）な自然」の双方を併せ持っていたのです。そして、この結びつき（交わり）を通じて「3つのもの」が生まれます。それこそが世界の3つの源泉であり、3つのロゴスの潮流、すなわち「精神世界（霊界）」「魂の世界」「肉体世界（物質界）」なのです。

ユダヤのカバラに含まれている全体系を、弟子はこの一つの「像」を通じて内面で考察しなければなりませんでした。弟子が正しいヴィジョンを獲得するためには、このような像を受け取ることが極めて重要だったのです。

私たちが考察したい第三のものは、最初期のキリスト教世紀における最初のグノーシス主義者の一人である、シモン・マグス（魔術師シモン）の思想の像です。彼は次のように語りました。

「最高位のものは『一（アイン / 唯一なるもの）』であり、それは常にあり、今もあり、これからもあり続けるものである。これについては語ることはできない。しかし、その次に来るものとして、『3つのペア（3組の対）』が存在する。世界はこれらから生成されたのである」

その3つのペアとは以下の通りです。

・第一のペア：
「悟性（Verstand）」 と 「思考（Gedanke）」

・第二のペア：
「声（Stimme：男性性）」 と 「名前（Name：女性性）」
（永遠なる世界の力が能動的に働くことによって『声』が発せられ、
受動的な本質がその『名前』を受け取ります。）

・第三のペア：
「思慮・慎み（Besonnenheit）」 と 「情熱・欲望（Leidenschaft）」

かつて、近づきがたい高みにはただ「悟性」と「思考」だけが存在していました。そして、深遠なる底からは「声」と「名前」が立ち上り、それらは中間領域において結びついて「思慮」と「情熱」となりました。そして、この「思慮」と「情熱」は、最も輝かしく最も完全なるものが成就されるために、再び「悟性」と「思考」の高みへと上昇していく（還っていく）ことになるのです。

シモン・マグスは、すべての弟子たちにこの思想を深く染み込ませました。そして彼はこのように述べました。

「そして私自身もまた、シモン・マグスとなった。それは、私がその一方の側だけでも、もう一方の側だけでもなく、『男性的なもの』として『女性的なもの』を追い求め、そしてそれを最も深い奈落（アビス）の底で見出したからである。――その女性的なものを」

これこそが、シモン・マグスがヘレナ（Helena）という女性と関係を持ち、それを自ら誇っていたという、あの表層の世俗的な伝説が生まれるきっかけとなった真相なのです。

「ヘレナ（Helena）」という名は、ほかならぬ「セレネ（Selene：月）」を意味しています。すなわち、それは女性的なる「月」であり、「イシス（Isis）」にほかなりません。 そして男性的なるものは「太陽」であり、それが追い求めるのは……。

このシモン・マグスとヘレナの伝説の中に表現されているのは、まさにこの（太陽と月の合一という）宇宙的な秘密なのです。（トロイア戦争におけるヘレナもまた、全く同じ意味を持っています。）男性的なるギリシャの精神が、女性的なるもの――ヘレナ、すなわちセレネ（月・イシス）――を見失ってしまい、それを奪還しようとすることが、あの戦争の根底にあるのです。これこそが、トロイア戦争の……（秘教的な）解釈なのです。

オイディプス（Ddipus）の伝説：

ギリシャの王ライオスの息子であるオイディプスは、生後まもなく捨てられ、異郷の地で育ちます。彼は、……の剣を覆っている巨石を持ち上げることができて初めて、故郷へと戻ることを許されるのです。――

これはまさに、ヘラクレスが新しい状態（地上の意識）へと眠り込んでいったのと「全く同じ意味」を持っています。

今や、彼は自分自身の内にある諸力を知らなければなりません。それゆえ、彼はまず低次の自然の力と相まみえることになります。そしてその次の段階として、新しい姿となった自分自身を正しく知る（自己認識に達する）ことが問題となるのです。彼は、自然（宇宙）から課された謎を解くことによって、自分自身を知ることになります。その謎を彼に突きつけるのが「スフィンクス（Sphinx）」です。

このスフィンクスが表しているのは、次のような要素から構成された一つの存在です。

女性の頭 ＝ 「魂（Seele）」
ライオンの身体 ＝ 「肉体（Leib）」
鳥の翼 ＝ 「精神・霊（Geist）」

すなわち、魂・肉体・精神の三位一体です。オイディプスは、この三位一体である人間の姿という「スフィンクスの謎」を解き明かします。その謎の答えとは「人間」にほかなりません。人間は、ただ「認識（Erkenntnis）」によってのみ自らを救い出すことができるのです。もしこの姿の中に自分自身を見出すことができなければ、人間は奈落の底へと突き落とされてしまいます。自分自身を認識することができなかった者は誰もが、スフィンクスによって谷底へと突き落とされてきたのです。

これこそが、カバラの根底にも流れている「自己認識」の本質的なあり方です。私たちは「王国（地上世界）」のなかを歩みながら、みずからの内にある3つのセフィロトの階層、すなわち「肉体の王国」「魂の王国」「精神の王国」において、自分自身を認識していくのです。

私たちはこの歴史をさらにどこまでも追いかけていくことができます。そうすれば、やがてアイルランドに生きたスコトゥス・エリウゲナ（Scotus Erigena / ヨハネス・スコトゥス）へと行き着くでしょう。彼は、人間は「肉体」「知覚」「感情」「欲望」「意識」から構成されていると述べました。肉体（物質性）の奥には未知のものが隠されており、意識の奥にもまた未知のものが隠されています。したがって、本当に明確に知ることができるのは、その中間に位置するもの、すなわち「知覚・感情・欲望」という「魂（Seele）」だけである、と彼は言います。この構成をとってみると、ここにも再び「肉体・魂・精神」という3つの階層（三分節）を見出すことができます。ただ、中間の魂の部分だけが3つの性質（知覚・感情・欲望）として詳しく提示されているのです。比較してみれば分かりますが、エリウゲナのこの分類は、仏教における五蘊の分類と全く同じものです。

そしてここで、私が先日公の場でお話ししたこと[*]を皆さんにお伝えしておきましょう。

[*] 1904年3月16日に行われた講義『精神科学的（人智学的）魂の理論（Geisteswissenschaftliche Seelenlehre）』。この講義は雑誌『Die Menschenschule』1956年1月号に掲載され、全集内ではGA 52に収録される予定となっている。

教会は、数回に及ぶ公会議を経て、最終的に9世紀（869年）のコンスタンティノポリス公会議において「精神（霊 / Geist）」を人間の構成要素から抹消することを決定しました。 その結果、それ以降の真正なるキリスト教の信者は、「人間は肉体と魂だけで構成されている」と考えなければならなくなってしまったのです。「人間三分説（Trichotomie）」は異端とされ、「人間は肉体（ Leib ）と魂（ Seele ）からなる」ということがドグマとなりました。

その時代以降、学問においてはただ肉体と魂の二つだけが区別されるようになり、それが現代の「人類学（アンソロポロジー）」と「心理学（サイコロロジー）」へとつながっています。かつては、「人類学（肉体の学）」「心理学（魂の学）」に加えて、「霊学（プネウマトロジー / 精神の学）」が存在していたのです。

皆さんもお分かりの通り、精神（霊）を抜きにして、魂を本当に理解することは不可能です。 これにはオカルト的（秘教的）な理由があります。魂というものは、死後にカマロカ（魂の国 / 煉獄）において解体され、純粋な精神へと移行していきます。（魂それ自体は永遠に形をとどめる永続的なものではないため）、人間がみずからの内に「永遠なる精神」を宿しているという意識を失ってしまえば、最終的に「人間の中には精神的なものなどそもそも何も存在しない」という考えへと突き進んでしまうのは、全く当然の成り行きでした。

まさに、このキリスト教教会の公会議の決定（精神の抹消）から、現代の「唯物論」が誕生したのです。現代の大学教授たち――（例えば、人類学を講じるヘッケルや、心理学を講じるヴントなど）――が講義を行っていますが、彼らのうち「霊学（プネウマトロジー）」について語れる者は誰もいません。

現代の学者たちは、かつての公会議の決定を忠実に実行しているのであり、それが長い年月をかけて、人々の普遍的な思考習慣（常識）になってしまっているのです。

○ヘラ・ヴィースベルガー：
『19世紀のオカルト運動とその世界文化への関係』の出版にあたって
―― 共同編集者ギュンター・シューベルトを追悼して

ルドルフ・シュタイナーによる13回の講義録
（1915年10月10日～11月7日、ドルナハにて開催）。
シリーズ名：『人智学の生きた本質とその育成』第3巻・第2部。
全集（Gesamtausgabe）、ドルナハ、1969年刊。
（※従来の文献番号：旧No.164に代わり、新No.254として収録）。

ルドルフ・シュタイナーによるこの一連の講義は、ギュンター・シューベルトがその編集に携わった最後の仕事となりました。

このことは今日、とりわけ注目に値することです。なぜなら、ここに扱われているテーマは、彼の生涯を通じて常に寄り添い続け、彼が最後に行った一連の講義（1969年3月）でも捧げられたテーマそのものだったからです。実のところ、人類の歴史や、秘教的な観点から見た人智学運動の歴史、そして秘教そのものの本質に関心を持つすべての人は、これらの講義を遺してくれたルドルフ・シュタイナーに対して、ひときわ深い感謝の念を抱くことになるでしょう。

それゆえにこそ、マリー・シュタイナー夫人も、アマチュアの速記者が書き残したノートゆえの多くの欠落や不備があったにもかかわらず、1939年にこの講義録を敢えて出版することを決意したのです。もちろん、今回の（1969年の）新版の出版にあたっては、アーカイブ（人智学資料館）に新たに寄せられた別の速記録と照らし合わせることで、テキストの大幅な補足と修正を行うことができました。ギュンター・シューベルト自身、亡くなる直前の1969年3月に行った最後の講義の中で、シュタイナーによるこれらの記述を、「歴史的な諸関係への理解を目覚めさせようとしたシュタイナーの絶えざる試みにおける、一つの最高到達点」であると評していました。

これらの記述は、『超感覚的認識の、かつての秘匿と現在の公開』というタイトルで出版されてもおかしくない内容を持っています。 なぜなら、この「秘匿と公開」という対立の根底にあるものこそが、すべての講義の幕開け（イントロダクション）であり、通底する基本テーマであり続けるからです。

「秘匿か、それとも公開か」という問いは、過去数世紀におけるオカルト運動の歴史の中で、まさしく19世紀の半ば（1850年頃）に位置する一つの決定的な転換点をマークしています。そしてそれは、私たちの現代

という時代の精神的構造を、「唯物論対 精神主義」という根本的な対立軸とともに決定づけることになりました。

進化の法則に基づき、西洋における知性的で、かつ唯物論的な傾向をますます強めていた世界観は、19世紀の半ばにいたって一種の「危機の局面」を迎えていました。それまで決して疑い得ないものとみなされていた宗教的・科学的な基本原則が厳しい検証にさらされ、その検証の結果として、知識生活（学問の世界）では「不可知論」が支配的になったのです。それ以来、認識の領域における唯物論と、実利主義（功利主義）の観点に基づいて構築された実生活のあり方は、西洋世界を決定づける主要な要因となりました。

このような発展をあらかじめ見通していた「人類進化の守護者（ Hüter der Menschheitsevolution ）」たちの間では、まさにこの19世紀半ばという時期に、「いかにして人類をこの危機の局面から先へと導くべきか」という、きわめて重大な問いが生じていました。人類の進歩に必要な「精神的潮流」を完全に絶やしてはならないという確信から、この実利主義の時代において、いかにして精神文化を維持していくべきかを決定しなければならなかったのです。

こうして守護者たちの側では、「霊的世界（精神世界）が実在する」という事実を、もう一度人々の普遍的な意識の中に定着させなければならない、という課題に直面することになりました。しかし、この課題はあまりにも巨大な問題であったため、舞台裏での一種の闘争へと発展することになったのです。

ここにおいて、いわば「2つの派閥」が形成されました。

一方の派閥――いわゆる「エキゾテリック（公開派）」は、これまでの歴史のなかで秘匿されてきた知恵の一部を公開すべきだという、時代が要請する必然性に応えようとしました。

他方の派閥――いわゆる「エソテリック（秘匿派）」は、何の準備もできていない一般大衆に対して秘密の知恵を一切漏らさないという、従来の慣例をこれからも維持することが不可欠であると考えました。

最終的には後者（秘匿派）の見解が優勢となったため、両者の間で一種の「妥協案」が成立しました。それは、「五感で捉えられる物質世界が存在するのと同様に、精神世界（霊界）もまた確実に実在する、という事実を何としても人類に知らせなければならない」という方針でした。

この妥協案がもたらしたのが、スピリチュアリズム（心霊主義）やメディウムイズム（霊媒質）の「現象」を利用する、という試みでした。

それは当時の唯物論的な傾向に対して、ある種の譲歩をせざるを得ないという判断に基づくものでした。これらの現象を通じて、人々に精神世界（霊界）が実在することを納得させようとしたのです。

守護者たちは、人間が事前の準備なしに高次元の真理を危険なく受け取ることができるほど、どの程度成熟しているかを確かめようとしました。しかし、結果は否定的なものでした。超感覚的知識の守護者たちが当然のこととして期待していた展開――すなわち、霊媒（メディウム）を通じて、人間を取り巻く自然環境との根源的なつながりに関する、ある種の知識が明るみに出るだろうという予測――は裏切られたのです。

奇妙なことに、ほぼすべての霊媒（メディア）たちが、自分たちは「死者からのメッセージ」を伝えているのだと主張し始めました。ルドルフ・シュタイナーは、スピリチュアリズムや霊媒的な手法によっては、なぜ死者の領域へと本当に参入することが不可能なのか、その理由を厳密に解き明かしています。このようにして、開始早々の段階で対抗勢力によって本来の軌道から曲げられてしまったこの試みは、まもなく放棄されることになりました。 その結果、スピリチュアリズム運動は胡散臭い要素（詐欺的な霊媒など）の格好の遊び場となり、創始者たちが最初に意図していた崇高な目的とのつながりを完全に失ってしまったのです。

人類が唯物論の中に完全に沈没してしまうのを防ぐための次なる試みが、1875年、ヘレナ・ペトローヴナ・ブラヴァツキーとヘンリー・スティール・オルコットによる「神智学協会（Theosophische Gesellschaft）」の設立でした。

ブラヴァツキー夫人の功績として残るべきなのは、当時世界的な大反響を呼んだ彼女の著書『ヴェールを脱いだイシス（Isis Unveiled）』や『シークレット・ドクトリン（The Secret Doctrine）』を通じて――ルドルフ・シュタイナーがしばしば指摘したような巨大な欠陥や不備が多々あったにもかかわらず――膨大なオカルトの真理を一般に普及させたことです。そして、優れた組織運営能力を持つオルコットの助けを借りて、神智学運動をまたたく間に世界的な運動へと拡大させた点にあります。

しかし、この神智学協会にどうしても付きまとっていたのは、そこでのオカルト研究（霊的探求）もまた、結局は「霊媒的な手法」に頼る以外になかったという限界でした。

人類の不可避な意識進化のプロセスのなかで、霊的世界をダイレクトに観察する能力（かつての古い霊視）が完全に失われてしまっていたため、当時の「見霊能力」は、先祖返り的な（アタヴィスティックな）素質を持つ人々の間でしか開発することができませんでした。秘密結社の内部においてさえ、かつての参入者（イニシエート）たちによって厳重に守られていた伝承の知識に対して、何か新しい知見を付け加えようとするならば、それは霊媒的な実験を通じて研究するしかなかったのです。

彼ら自身はもはや直接世界を見通せる霊視者ではなかったからです。この理由から、霊媒として異例の才能に恵まれていたブラヴァツキー夫人という人格をめぐっても激しい闘争が巻き起こり、最終的に彼女もまた、健全なオカルト主義の王道ら引き離されてしまうという結果に終わりました。神智学協会における研究手法は、かつて霊媒主義（メディウムイズム）を利用してオカルトの真理を一般化しようとして失敗に終わった、あの「最初の試みの延長線上」にあるものにすぎなかったのです。

現代の「科学的意識」に十二分に叶う全く新しい方法を開発することによって、超感覚的世界の実在を公の前に毅然として主張することに成功したのは、実にルドルフ・シュタイナーが最初でした。

彼　は、他者に依存することのない、自立した独立した方法で霊的世界を研究するための道を切り開き、その具体的な方法を完全にプロセスが見通せる検証可能な形で、自らの著作の中に書き残しました。今回取り上げている講義録（GA 254）の第2回目の講義の中に、非常に示唆に富むシュタイナー自身の言葉が見出されます。

「しかし、これこそが私に課された道であったのだ。すなわち、過去のあらゆる研究方法を拒絶すること。たとえ超感覚的な観察という手段を用いるとしても、研究者であると同時に一人の人格に『啓示』として与えられ得るものだけを頼りとし、それを用いて近代的な科学と同じように研究を進めること、これである」

この毅然とした発言は、彼の「霊的遺言」とも言えるもう一つの言葉の意味を同時に説明してくれます。その言葉は、マリー・シュタイナー夫人が1945年7月に執筆した小冊子『遺稿管理委員会の任務とは何か？』の中で、後世へと伝えられました。彼女は次のように記しています。

「彼は私に、自分がもういなくなって、私が彼の仕事のために立ち上がらなければならなくなる時代のことについて語ってくれました。この彼の人類のための仕事が、彼の『名前』と結びついたままであり続けるように、と。なぜなら、彼に対して忠実であり続ける者はごく僅かであり、もし彼の仕事が彼の名前から切り離されてしまえば、それが本来の意図から疎外されてしまう危険性があるからです」

また、1924年から1925年にかけての彼の闘病期間中に彼を診察していた医師、イタ・ヴェーグマン（Dr. Ita Wegman）に対しても、シュタイナーは次のように語っていました。

「私はただ物理的な次元（地上）を去るだけにすぎない。しかし、もしその後に敵対勢力が、人智学を私から切り離すことに成功してしまえば――つまり、私の存在（名前や歩み）を知られることのないまま、その教えだけが広く大衆へと行き渡り、その結果として教えが通俗化・形骸化してしまうならば――それこそが、まさにアーリマン的な存在たちが望み、意図していた通りの結果になってしまうだろう」

これらのすべての結果（十字架）をみずから引き受けることが、ルドルフ・シュタイナー個人にとって一体どれほどの意味を持っていたのか。それは、本巻の第4回目の講義に見出される次の言葉から明確になります。

「秘教の知識の一部を、あえて外なる世界へと開示（エキゾテリック化）し始めるというこの道は、まさに歩まれなければならない。そしてこの道は、たとえそれが次から次へと災難（不運や衝突）をもたらすものであるとしても、自ら進んで歩まなければならないのである。私たちが今こうして『精神科学（霊科学）』を行っているという事実そのものが、いわば、あの19世紀半ばの『公開派（エキゾテリック）』の原理が遂行されるべき必然性を私たちが認めているという証拠なのだ。私たちが実践しようとしている精神科学のあり方、その真摯な探求とは、ほかならぬこの公開の原理を、ある確固たる方法において、誠実に、実直に遂行することにほかならない」

ルドルフ・シュタイナーの歩みに付きまとった「災難に次ぐ災難（Kalamität über Kalamität）」というこの言葉は、多くの意味を内包しており、人智学協会の苦難の歴史全体（Leidensgeschichte）に強い光を当てています。

実のところ、この「災難」こそが、ルドルフ・シュタイナーにこれらの講義を敢えて行わせた本来の動機でもあったのです。というのも、この講義が行われていた当時、ドルナハで建設中であった「第1ゲーテアヌム」の周囲に集まっていた人々のサークルの内部では、協会生活の全体を根底から脅かすある深刻な問題がくすぶっていたからです。

誤解されたエソテリック（秘教）と結びついた、極めて主観的な動機や妄想が、一種の「精神病理的な状態」へと形を変えて暴走し始めていました。ルドルフ・シュタイナーは、自らが協会から完全に離別してしまわないために、果てしない対話を通じて、この混濁した会員たちの意識に理性の光を当てて明晰にせざるを得ない状況に追い込まれていたのです。

それゆえに彼は、「最も自由な形で現代の『精神科学（霊科学）』の上に構築されるべき協会が、その最も深い本質において、いかに精神病理的・先祖返り的（アタヴィスティック）な要素の侵入によって脅かされ、危機に瀕しているか」という点について、断固たる態度で聴衆に解き明かそうと試みました。これらを多角的に基礎づけるために、オカルト主義の本質、秘密結社における従来の秘教の扱い方、そして「現代の精神科学のための協会」においてなされるべき必然的な扱いのあり方、さらには独善的な逸脱の危険性などについて、極めて精緻な論考が数多く展開されたのです。

ここで、詳細な研究を要するそれらの細部のすべてを挙げることは不可能です。しかし、これまでに述べたことだけでも、これらの講義が人智学運動の「自己理解」にとって決定的な重要性を持っていることは十分に明らかでしょう。これこそが、本巻が全集のなかで『人智学運動および人智学協会の歴史に向けて』というシリーズの中に組み込まれた理由なのです。

とりわけ、これはギュンター・シューベルトの強い願いでもありました。彼は病床にありながらも、この巻の出版をこの上ない関心を持って見守っていました。彼は「超感覚的認識の秘匿か公開か」という問いと密接に結びつき、人智学のような運動が抱える困難のより深い根拠を浮き彫りにするこの重々しい「災難（問題）」の全体に対して、人智学の現場における50年近くに及ぶみずからの活動を通じて、幾度となく精力的に向き合い続けてきたからです。

このことは、ある運命的な事実によってさらに鮮明に裏付けられています。先述した通り、彼は遺稿管理委員会と極めて密接な関係にあったドルナハの「ルドルフ・シュタイナー支部」において、シュタイナーの著作に関する21年間に及ぶ講義活動を行ってきましたが、その生涯最後の講義として選んだテーマこそが、まさにこの出版を控えていた『19世紀のオカルト運動』の巻であったのです。

彼は予告していた4回の講義のうち、実際には3回しか行うことができず、この巻自体の出版（本が完成すること）を目にすることなくこの世を去りました。

だからこそ、私たちは、シューベルトがこの記述（講義内容）の中に深く感じ取っていた「人智学運動の自己理解にとっての、この上ない重み（重要性）」、そして『ルドルフ・シュタイナーの仕事を彼の名前から切り離してはならない』というシュタイナーの遺産に対する彼の模範的な姿勢を、決して忘れてはならないのです。この厳粛なる熱意こそが、ギュンター・シューベルトの講義スタイル（歩み）を決定づけていたものだったのです。

ヘラ・ヴィースベルガー
（Hella Wiesberger）